３　「思考力」を育成する学習指導の実際

単元　「風に乗って旅しよう」（４年）

＜本時育成したい「思考力」＞
「強い風」「弱い風」と感じた理由を探ることで，色や濃淡，線などの造形要素の表し方に違いがあることに気付き，自分の表したい風の感じに合った表現の仕方を考える。

本題材は，風に乗って行きたい場所を想像し，その場所の様子やそこで吹いている風を水彩絵の具と貼り絵の方法を用いて絵に表す学習である。ここでは，**「イメージした風を水彩絵の具を用いて表現する」**における学習指導レベルの教材と反応の組織化について述べる。

（１）学習指導レベルの教材

○　「強さ」「弱さ」と造形要素の関係が見出せる前時の絵

「嵐のような激しい風の感じを出したい。」という子どもに「色を濃くしてみよう。」「勢いよく線を描くといいよ。」と言葉のみで表現の工夫を伝えたところで，子どもはそのよさを実感できない。そこで，本時では，具体物として２枚の絵を用い，そこから表したい感じに合った表現方法を探ることで，視覚的によさを実感できるようにする。その際に前時で描いた絵の中から「強い風」「弱い風」をイメージしやすい絵を選び，それを用いる。

前時で子どもたちは，スパッタリングやドリッピングなどのモダンテクニックを体験したり自ら見付けた表現方法を試したりしている。そのときに偶然生まれた模様を本時では風に見立てて表現の工夫を探っていく。教師があらかじめ準備していた絵を用いるより，子どもたちが実際に体験した中で生まれた絵を用いることで，「○○の部分は水を塗った上に絵の具を置いてにじませている。」「ブラシをはじいて点が飛び散るように描いている。」等，前時での活動を想起しながら表現のよさを見付けることができる。さらに，このことは各自がイメージした風を描く際にも表したい風の感じと体験とを結び付けながら表現の仕方を探ることができ，工夫の幅を広げることができる。

＜強い風＞

＜弱い風＞

また，本来１枚の絵から風をイメージする場合，「吹雪」「春風」「初夏のさわやかな風」など多様なイメージが出るのが当然であるが，このままでは，一人一人のイメージの相違点と着目した表現方法の相違点を整理することが必要になり，それらを子どもが理解し，共通認識の下に話し合いをするのは非常に困難である。そこで，多様な表現方法が使われている絵の中から「強い風」「弱い風」をイメージしやすい絵を選ぶ。そうすることで，イメージを大きく二つに絞ることができ，様々な観点が混在した複雑な話し合いになることを防ぐことができる。つまり，話し合いが「表したい風の感じを出すためにはどんな表現の工夫ができるか」という観点に焦点化され，本時にねらいたい思考を生み出すことができるのである。

（２）子どもの反応の組織化

子どもたちは，２枚の絵（上部写真参照）を風に見立て，「嵐みたいに激しい風」「春に吹く柔らかそうな風」などをイメージした。さらに，それらは，大きく分けると「強い風」「弱い風」のどちらになりそうか考え，その理由を話し合った。

まず，「強い風」と感じた理由から探ることにした。すると，「濃い色を使っているからです。」「水の量が少ないからです。」など，子どもは，色や線，技法など様々な点から理由を言い始めた。そこで，着眼点の違いが明確になるよう以下のような支援を行った。

【異同関係の明確化】

「強い風」「弱い風」と感じた理由を色，濃淡，線，表現技法などの要素のまとまりごとに話し合わせ，整理して板書することで，着眼点の違いが明確になるようにする。

Ｃ１：「○○のところの線が太いからです。」
Ｔ　：「同じように線のことで気付いた人はいませんか。」
Ｃ２：「線が勢いよく描かれているからです。」
Ｃ３：「線が赤色ではっきりしているからです。」

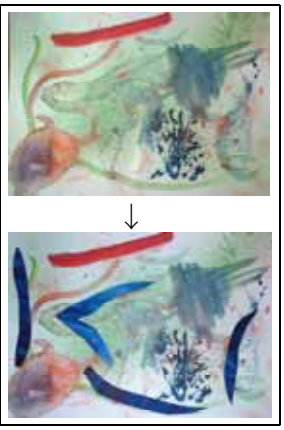
上のように子どもは，強いと感じた根拠を造形要素のまとまりごとに述べていった。教師は，それに合わせ「色」「水の量」「線」などのキーワードとなる言葉を提示しながら，まとまりごとに整理し，板書していった。しかし，Ｃ３のように線について述べながらも着眼点は色という意見も見られた。そこで，このような意見については，着目しているのは色であることを確認し，色の観点で意見をまとめていった。以後，子どもたちは，他の要素についてもまとまりごとに意見を述べる姿が見られた。

このようにして「強い風」と感じた理由を整理していったわけであるが，多くの子どもが「強い風」と感じた絵を，逆に「弱い」と感じた子どももいた。そこで，その理由を聞いてみた。
「水が多く，なめらかな線で描かれているからです。」
「線が途中から細くなって消えていくみたいに見えるからです。」

しかし，ほとんどの子どもが「強い風」と感じているため，その理由に納得できない様子であった。そこで，以下のような支援を行った。

【意味の共有化・整合性の吟味】

どこの部分からそう感じたのか提示されている絵を使って説明させるとともに，「弱い」と感じた部分を「強い」表現に変えることで，弱い表現であったことを実感させる。



Ｃ：「○○の線のこの部分が消えていくように薄く細くなっています。」
Ｔ：「ここの部分のことを言っていたんだね。では，どうしたら強い感じになりそうですか。」
Ｃ：「濃い色にしたらいいと思います。」
Ｃ：「線を太くはっきりさせたらいいと思います。」

そこで，出された考えを基に弱いと示された部分に濃い色で塗った画用紙を切って上から貼り，貼っていないときと感じを比べるようにした。
「ほんとだ。さっきよりもっと強い風になった。」
「○○さんが言ったところは，確かに弱い感じのするところだった。強いと思っていたけど，弱いところもあった。」

このことは，弱いと感じた理由を共有化するとともに，強い感じを出すための表現の工夫を実感する場にもなった。

そして，「僕の表したい風は，車も飛んでしまうぐらいすごく勢いのある風だから，筆をかすれさせて濃い色で勢いよく描こう。」など，イメージした風と見付けた表現の工夫を結び付けながら描いていった。